

女の史料(三)

中村いと「伊勢詣の日記」

片倉 比佐子

十六七のころにやありけむ 蔡好院様につきそひまいらせ
て 江のしま鎌くら金沢のあたりくまなくめぐりしに
かまくらしとやらんいふふみにて その名所あなぐりたつ
ね給ひしまゝ 数かさなりていとこゝろなぐさむ旅路なり
けり されど何事もつゝましくてことにはいださざりつれ
ど 春のけしきもつかうかと 波路はるかに見渡したる七
里か浜なといへるあたりは めとまりてめつらかに覚ける
かゝるあたりを見るにも また折を得て 都大路の名所
須磨あかしの浦など 行見たらむはさそかしとこゝろのそ
こにおもひつゞけたり 帰りし後も静なる折には所々のさ
まおもひ出て ひとりこゝろになくさむ事を多かりき 年
のそひ行にそひて み子たちも多くて 手わさいとなみも
しげければ 宮寺に詣するもこゝろにまかせず 少しも静
にいとまある時は 名所図絵などいふ文くり返して その
所にあそふのおもひをなせり されと時得たらんには伊勢
の御社にはひとたひ詣てたきと こゝろのうちにはねき侍
りしなり されとも百里をへたてし旅路の ことさら女子

の身なれば 身にかなひたる道つれのあらではおもひくわ
立かたく ともかくにも女子の身のこゝろにおもふのみ
にて かなはぬ事を多かる世のならひなりとくわんしくら
しぬ ある時中橋なる花女のもとに行て一日二日とまり
居たりしころ 木挽町なる天満やのみを女来りていへらく
ことしは伊勢太々講にあたりて 悴市郎兵衛詣てつるによ
りて 我もともに都めぐりなからに行事となりぬ されと
女子の男の中にひとりまじりて行んもわびし あはれよき
道つれもがなとおもへとさらになし 君こそよき友人にて
こそあるなれ 伊勢詣でし給んやとしきりにすゝむ おの
れもむかしより伊勢詣の事はねんし居たりし事なれば 能
折そとはおもへと また当主のゆるしなくてはこゝろにま
かせず 帰りにかたらは見んといへは ぜひにとまひ奉
りたしといふ 花女にもそばよりすゝめ奉れなといふは
花女か娘の姑顔也けり 高野のあるしもこはよきつれなり
かゝる時ならては出たち給ふ事もかたかるへし あとの事
はとまれかくまれ帰りてはかり見給ふへしといはれて い
そき帰りてかくと当主にかたりねきけるに そはよきつれ
なり いて行給へといはるゝにうれしきさきりなく おた
ね女もともによしといはるゝにこゝろおち居て 俄に旅の
用意するもこゝろせかれつるをおかし たゝその出立日の
幾日といふを待になむ 文政八年乙酉の三月十三日は旅

立によき日なりとて 此日にさたまりぬ 天満や手代をも
連たれば 供人とも五六人になりていとかまひすし 駕輿
なども用意とゝのひ 鹿島立とて送の人々もつとひ出たち
て 品川宿むら田やにてやすらひ 送りのものも帰しつ
此日天気もくもりたれと雨もなし 品川にて手間とりたれ
は いと遅く神奈川宿羽根沢やに宿りをとれぬ

三月十四日 天気もよくて朝五つ頃立出 戸塚宿にて休ら
ひ 江の島に詣て 岩本院に行て皆々中食などして 御
山めぐりす はしめて来る人も多ければ 岩根ふみわた
りてあそふ 此島へは若かりし時来りて くはしくおか
み奉りしまゝ 人の行ぬあたりまでも心にうかみていと
たのし こゝの岩本院主のたのみなりとて 神田の隠居
の碑文かゝれたるは 頼朝公御建立ありし一の鳥居の石
碑にて その修復ありし事をしたる石ふみのよし
此御神御垂しゃくの事までつばらにするし 八分書とや
らんにて書かれたり 此御山にては第一のいしふみなる
よし 雲山子の発句にも 江の島は仏翁の碑に富士の秋
なと称したり 夫より島を出て 片瀬むらなと過 藤沢
のやとりに着 葛や某かもとに宿す
同十五日 天気よし 朝五つころ立て馬入川さかは蓮台に
て越す ふし山いとよくはれて見ゆる 此あたり風景よ
し 大磯しき立つ西行庵なとくだしければしるさす

小田原宿たば粉やと云にやとる

同十六日 けふも天気よし 是より箱根也とてみなみない
さむ 辰のころ出立 山路にかゝり 風祭過て 長興山
をも見あげたれど つれの人々さのみかゝる風色を好め
る人もなければそのまゝに立ちよらて過ぬ 三枚橋など
云を渡るに 塔の沢よりつゞける流なりとて 石にせか
れてさかまく水音などいとはげし また見なれぬめには
いとめつらしき山川なりとおもふ それより箱根御番所
にかゝりて 御あらため手形などにてひさしく手間とれ
り 事ゆゑなくすみて御関をも通り過ぬ 山中かぶと石
と云処の茶店にてみなみな休ふ 御関所前の坂はしろ水
坂ざとうころばしなど さまさまむくつけき名あるけは
しき坂とも多く 人馬ともに息つきあえぬさまなり さ
れと此処に行かよふ事のなれたるにや 馬などのもの負
てのぼるに その間の石より石にひづめかけて あやま
たずのぼりくだりするぞあやうげなる さて此処より三
島へ下るにはさかもなだらかにて 人馬ともかよひ安し
三島にやとりをとる 宿や家名はわすれたり

同十七日 天気よし 朝五つころ出立て三島明神の御社に
詣て それより雨も降出たれば見処もなくふしも見えす
夕方ぬまずの宿かとやに宿す

同十八日 晴天 けふも五つ頃に出たつ 富士山雲もなく

見物いとめつらしく 麓のあたり横雲引渡したる景色見
処多し むかし人のふしには及ふことの葉もなしとなか
め給ひしもことはりなる 興津より清見寺にいたりて
三保の松はら見渡したる風景系にかけるかこく 每人
のすなとり見ゆるも興あり しはし休らひ 大野村竜慶
寺に行て名高きそてつきほてんを見るに まことにめつ
らし 庭の景色もいとよし 夫より久野山へ参詣す 一
七まかりとかいふ石坂を見あげたるにいと高し 坂の上
には 榊原某殿の預にて むかしより此番所をまもるよ
しきけり 山上には山本勘介とやらいへる甲川の士のさ
し図にて掘たる井戸あるよし 山上ゆゑいと深く底は見
へぬとそ この久野の御山はむかし甲斐信玄公のとり手
の城にて 勘介の縄張にてなれるとなむ その夜は府中
に泊る 中か万やといふ

同十九日 快晴なり 今日は大井川にかゝる 蓮台出して
乗つれば 折ふし水かさすくなく 河原広く見渡されて
おとにきくしほとおそろしとおもほはさりき 川越と
もく多く出て むかふ前の岸につとひ 人の渡るをあら
そひさはくさま 系にかける黒ほうなどのことく見へて
いとおかし 打渡りて全谷の宿に泊る また宿屋の家名
もわすれたり

同二十日 天気よし 日坂わらひ餅 皆々休らひて食ふも

由緒系図を石碑にしるし建られし 是は隠居のつとめら
れし時 三川庵山御用におもむかれし折也 此国の碧海
郡とやらんに中村といふ所もあるよし 御先祖の土地を
しめて居られし所なりとそきく及ひし 宿よりはるかに
拝して行つゝ他鯉鮒もめんやと云宿にとまる

同廿四日 けふも雨天なりしか昼のころより雨やみて 他
鯉ふを出 熟田明神の御社にまうする この御宮居のき
宝珠は 信長公の御代御造宮なりとて その比の年号
たしか永禄かと覚しほり付あり からかねも青くなりて
いといと見事なり 名護屋の芝居見むと若き人ときはき
たちて見に行ぬ 狂言は兵名そう動とか覚へし 田舎と
はいはれすすへてとゝのひたる事ともなり 夕かた宿ま
る屋と云に帰りて休む

同廿五日 また雨となりていと物うし 尾川の御天守を見
あけるに 是もその御代になれるまゝなりとそ 瓦には
信長公の御紋窩をゑりつけたり 此瓦は江戸神田の家に
古瓦譜二帖あつめ給ひしうちにも石摺にして在しか 大
きなるもの也 夫よりさやまわりして弥五郎天王の御社
に詣す 此御社は中村の家の御先祖のうなる御方を合
せ祭れる社と聞置たれば ことさらありかたく 中村家
御子孫繁栄をこゝろにいのりてぬかつき奉りぬ 樹木寺
観世音に詣て それより船渡し廿八町 また海上三里

おかし さよの中山にかゝる 松並多く 右の方は甲川
信川のかた見渡さる 中山観世音に詣す 名高き夜なき
の石宝物いろいろあり つたのはそ道は今の海道よりひ
たりの方の山みちにて 樵夫ならてはかよひ路なきよし
人のかたりき 今夜は見付の江戸屋といふに泊

同廿一日 天気よくて見付を立出 天竜川にかゝる 此こ
ろ日よりつゝきたれば水かさも少なく 船渡しも静なり
あらぬの御番所 とゝこほりなく御あらため済て通り
七つ時ころきの国やに泊ぬ

廿二日 快晴なり 六つ半ころ宿を立 白須賀ふさ河のあ
いたにたゝせ給ふ岩屋観世音 みたけ壺丈六尺 山上に
あり 此処よりふり返り見れば あら井はむかしの兵名
の橋ありし所なりと聞に 今も入毎のさま残れたり 此
兵名の橋かゝりし時の絵を 神田の家に二枚折の屏風
にしたるあり 旅人なとも烏帽子きたるありて いとふ
るめかしき図なり 景色もさそとおもはる 今もその風
景いとよし 御曲の宿にやとる 巴屋と云

同廿三日 雨天 御曲を出て赤坂藤川過 岡崎の宿にて中
食にやすむ 此駅の奥 右之方に大樹寺といふ御寺あり
て 御代々様の御墳墓あるよし 御入国の時三河より御
供して江戸に移り給ひし中村氏の御先祖三人の御墓所も
此御寺の念仏堂の前にありとそ 先年柴野先生の文にて

桑名へ船路なり 雨天ゆゑとま引たれば景色もなく は
やく宿りをさため駿河屋といふに泊

同廿六日 雨天 くわ名を立て四日市にかゝるに 神なり
はためき大雨しのきかねて 屋頃四日市に泊りをとる
はたこや帯屋と云

同廿七日 快晴になる 六つ半ころ出立 神辺を過 白子
の観音堂に詣る 白子うへのかたによりてふたん桜あ
り 立より見るに 返り咲の花のことし 三月の末なれ
は四方の桜は大かたに散行たれと 此花は今咲出たるか
ことし けふは上野伯となる 宿や名わすれたり

同廿八日 天気よし うへのをたちて津を過る あこきか
浦に引あみのとよみしも此うらのことなるへし 雲津川
わたり けふは屋の食には はつ鯉を買得てみなみなめ
つらしとてよろこふ ことに美なり 人々酒のむ くし
田紅葉屋とまり

同廿九日 快晴なり 此日太々講の人々も集り 皆々うち
そろひいといとにきはしく 伊勢にても二三年なき賑ひ
なるよしきたせり ふし彼よりも手代来り 鯛二まい
あわひ十はかり進物とて贈りぬ いとあたらしにて調
理す

四月朔日 天気よし くし田より出 新茶屋揃酒肴を出し
むかひの籠輿数来りて銘々うち乗り出る 新丁和泉屋と

云にてひるの食事す 夫よりくし田川いなき宮川の渡しをわたり二見浦に行 山のうへの茶店にてさげ重などとり出休らひつゝ 夫よりして藤波神主の方に宿る 種々馳走ありてうるさし 湯に浴して寝所につく

同二日 天気よし 朝飯終りて けふは御宮詣てせんとて出る 此日は太々神樂なりと云て群集す まきせんとかいひて多く出せり さて年ころ此御社には詣奉らんとねきことし居たりしに けふはからず時節来りて みづからちかきあたりみめぐるぞありかたき 御社に詣てぬかつき拝し奉るに 何ごとのおはしますかはしらねともかたじけなさになみたこはるゝと言歌は 世に西行法師の詠なりと云 そはとまれかくまれまこゝろにいひつゞけたるなりけり おかみ奉るこゝろのうち 此歌のごとく覚へていといとありかたし けふ此御社に詣る事も当主のこゝろよくゆるし 還の旅路の費用だにこゝろにかゝる限なくものし給ひぬるそうれしき たゝ中村氏の御用のつゝがなく 子孫の繁栄家従の繁昌とりとりねき奉りぬ 宇治橋わたり あまたの杜いちいちをかみめぐりてまた 神主のもとに帰りぬれば 七五三の料理とて種々さまざまなり かねて聞しごとく太々講中へは御師よりの馳走はことに美をつくすといひしが さることにてとりならべたる数多きを見るばかりなりける 無益の事なりといふべし 夕かた皆々つどひ出て ふる市備前屋といふへおどり見にとて行にともなはれて興しあへり

同三日 天気よし けふ浅間山へ詣んとて皆々肩輿にて行ぬ 山のうへには 藤波より弁当酒肴とり揃へ待出てちそう多し 此処の景色筆にもつくしかたし 虚空蔵御堂へ参る 奥院三丁はかり入ぬ 夫より鳥羽の七島見渡して風景尤よし 外宮へ詣て あまの岩戸なと残る限なく見めぐり詣す 御師よりまたまた迎ひ出て待居りて 茶屋にていろいろ馳走す ふる市よりおやま大勢づれにてかざり来りもてなす こは天満屋のとじはいとはてやかなる女子にて 女郎芸者やうのものにもものくれなとすればなり 備前屋よりもせいろう贈り 柏屋よりも進物いろいろあり 帰りにまたまた藤波にてしたく直してかしわやへおとり見に行 たゞ二三日はもの見あるきて後 興ずる事のみ多し

同四日 雨降 けふはふる市の芝居見むとて行 其事聞つて またまたおやまどもをしかけ来りしまゝ 棧敷二軒 外にまして見物いとにぎやかなれば 役者どもも狂言そゝり立て 却ておかしく興あり 天満や市郎兵衛も若く 連たる手代半蔵の外は皆若ければ ただこゝろうかれてまたふし波へ帰り おやまどもも供して行ぬ

同五日 天気 けふは藤波にて休息し買物なとそろへ 江

戸へのおくり物しらべて 此処立したく用意とりとりなり 此ころ二三日は世に云伊勢をんどのおどりは あくまで見たり よききりやうなる子供女子も多し 若き男のうつゝぬかすもことほりと云へし 女子にて見てはいとおかし

同六日 朝くもり いせ地立出る みなみな肩輿^{かこ} しん茶やまで御師よりも茶や泊屋みなみな送り来り こゝにてまた色々馳走なり 朝も四つ過に出ぬる故 いろいろ手間とり 松坂どまりとなる

同七日 天気 松坂を出立 六けんより大和地へと心さし行に 昼ころより大雨になり 雷つよく鳴わたるゆゑ 八つころかいとへとまる 万やと云

同八日 曇 立出てより雨降 青山峠三里ほと雨にて越 昼より天気になり なゝ見とうげこして三本松にて休む 此松は根一株にて三本になれるゆゑ 処の名も三本松とよふと云 さいはらへとまる 宿やの名わすれたり

同九日 快晴にてよし 是よりは名所も多ければみなみな天気をいのる 山辺といふ処に赤人の宮と云あり 此処より出給ひし人か 又は山辺といふより あとから宮のへくりしものか 万葉集の歌なときゝ置たりしもわすれたり ものしれる人に問べし こゝは伊賀山との堺のよし 追分なり

同十日 天気もよし はせ観音へ詣る 石坂廻廊あり 御

堂尤ふるくいとありかたし 山門の額は菅相丞の御筆のよし八字也 そのうつしは神田にありて見し也 桜のころは左右花にて 見おろしたる景色さそとおもひやらる山の上には学寮ありて衆僧の軒をつらねたり 夫より三輪明神へ参詣す 神さびていと尊し 黒木の鳥居 小しばかき 杉立てるばかりありかたく覚ゆ 此処名物高田やと云にてそうめんみなみな食す 酒肴も出したり 丹波市にて休らふ けふは五里はかりも来たり 日々五六里に過ぎる道中ゆゑゆるとあゆむ人もありけり 中食は大津屋と云に休む 帯ときと丹波市との間にあり原寺 業平の古跡とて つゝ井つゝの井戸なといひのゝしるもおかし 人鷹塚もあり 程なく奈良へ出る 五重の塔六つあり なら物を見る 春日御社へ詣てぬかつく 本社若宮神々の社にまいる 御修覆の最中なり あたりには鹿おひたゝしく出て立めくる 江戸のあたりにては狗なと居たるが如し 人にはよくなつきておそろしからす思ふ

同十一日 天気よし 二月堂へ参り 大仏より法花院へ参る 是は秀頼公御母堂御遺言にて片桐市正奉行せしよし 西大寺へまゐる 昼頃より雨降出し道あしく 菅原天神御誕生の処と云 夫より法隆寺宝物拝見し 聖徳太子御

木像いと尊し 夢殿は内裏のことしとぞ 七堂伽藍備り
たるは此御寺なりと云り それより西の京へ出 立田明
神に詣 たつた川わたし也

同十二日 天気よし 六つ過に出る たゑま寺参る 中条
姫蓮糸曼陀羅 廿九歳木像あり はすの糸あらいの井戸
糸かけ柳と名つけたるあり その傍に尼の庵ありて茶な
と出す 四月十四日は祈り供養ありて賑はしと云 あす
か明神 岡寺 高田門跡 こゝは植村駿河守の領分なり
と云 夫より塔の峯に行 此処は女人は禁製なれば女人
道より山あひを登り 山の上より一めに見おろす 山路
あしく嶮岨にて難義なり 夫より芳野へ行に よしの川
船渡し よし野もまた山谷多く 籠にてみなみな漸のほ
る 一目千本の茶やに休む 花のころはさそとおもひや
らる さこや伯り

同十三日 ふた夜とまり 大みね山上とて男子は七里のほ
りくたりすと也 一日留守に居てあらひ物なとたのむ
よし水寺へ行 此寺に義経の駒つなき松 弁慶のちから
石なと名つけてかたる ありかたきは御醍醐天王の御木
像のよしおります 其外義経の弓矢かふとなどいろいろ
宝物あり 蔵王権現 御丈二丈六尺ありと云 鳥居の額
は道風の筆と云

同十四日 天気よし 吉野をたつ 村上彦四郎の墓あり

久七といへるとぞ

同十七日 天気よし 岩手を立て紀路へといそき 御城下
へ参りて日高やといふ茶やにて休息 酒肴あり よへの
ものうさを少し直したり 雀すしと云名物のよしにて出
ぬ 著しめものなともあり 処からには相応の事なりと
てみなみなよろこふ 紀三井寺へ詣す けふは十七日な
れば観音参詣多くていとにきはし 眺望はいはんかたな
し 並木の松多く 毎の面青々としていきこ清し 布引
の島 王津島明神 和歌三人の御社 心しつかに詣て奉
る わか浦のけしきおもひしよりもおとれり 今十七日
四月なれば 上の御祭ありとぞ 江戸山王祭礼のことし
と云 わか山まつりきのふのあらしにて 松之木棧敷の
こらす吹たをしたるよしにて 廿一日に祭のひしとなり
此御祭見むとて皆いそきしも 六日のあやめとなりぬ
御城下見めくるに 五百羅漢 秋葉山 あたこ山なとあ
かめまつれるあり たた目なれぬものにして 是そ奇な
るものとおもふは根あかり松なり その大木あまたあり
て 根のあかりて見ゆる四五尺より七八尺に至る処もあ
るへし その数あらまし数へたれとまきれて止め 廿五
六本はかそへたり むかし磯きはにて痕の根土ゆり落し
ゆり落して土地もひきくなり 今かくのことく年ふりて
も枝葉栄へ なみ立るならんとおもふにいとめつら

役行者の木像蔵王堂にあり 夫より柳のわたし うのと
うけ越し ゑひやと云にて中食 夫よりかみやへと心さ
して禿伯 宿は王や与治と云

同十五日 雨天 高野山へ罷下る 昼ころより天気になる
不動坂はな坂四十八瀬越なとして 女人道休房より料理
なとして廻り みなみな食す 酒をはこますとよはせし
よし いみことはなるへし 男子は皆々参詣 女子はう
へ廻りとして廿丁はかり登りて見おろし候へと 伽藍も塔
も家根はかり見へてくはしからず その上天氣あしく
弘法大師御廟拜し 丸木橋いろいろ見所多く 案内のも
も縁起述るといへと 雨天ゆゑそこそこにして王やへ
帰りとまる

同十六日 雨天なれともけふは若山まつりのよし故 紀の
路へ出るとて かふるより船にてわたりし処大雨になり
ことに雷つよく 岩手と云処へ漸に七八丁もとりやとを
とるに 此処もとより宿やなければ頼みて一宿 ますに
あしきところにて 道中のうちなき難義の事ゆゑ みな
みななけとせんすへなし 湯にも入事ならす 夜具も
なければたゞつみて一夜をあかす もとより食物もな
し 麦なと食し居たり そのうへに大雨ゆゑ出水とてさ
はき こゝろならぬめに逢しなり されと此処にとまり
ぬ あまりのものうさに宿の名をきゝて覚へたり 松屋

かにて かゝる木立いまた世にまれならむとおもふ 吹
上兵も近し すへて此あたりはむかしより和歌にも詠た
る名所多し 若山御城下あふら屋といふに泊る

同十八日 天気 六つ半ころ立出て たいの頼と申処の渡
り 乗合にて人多く混雑せり 漸々の事にて渡りつき
岸にあかりみなみなよろこふ あたこ山とて山下より見
上るほとなる処あり それより半丁あまりも行つらんと
おもふ程に大字にてありつけたる仏庵墓といふ石碑あり
高さも六尺はかり 下台に門人等造としるせり 少し道
の行手にて小高き処なり 人々奇なりと見て過る また
半丁はかり行は あり通しの宮有 阿波路島あかしなと
はるかに見渡さるる処ありて風景をよし 此処茶店あり
て休む 夫より所々見めぐり日子ちやにて中食 かい原
千のやへとまり

同十九日 天気 かい原立出 いつみのしのたへ行 楠木
二本あり 是は名木なるよしを云 利休の庭石灯籠あり
清明の稲荷 はま寺 妙国寺蘇鉄大なるものなり 住吉
明神参詣 石はやのまつ 天下茶やなど見る 岸の姫松
多くもあらず 住吉御社は結構なり 堺より大坂につき
河内や又六かたに泊る

同廿日 快晴なり 皆々一同にいふ 是まで来りつればさ
ぬきへ渡り金毘羅参詣せむと云 さらは今夜より船に乗

るへしとて 屋のうちは角の芝居見物にとすゝめられて
棧敷かり皆々行 芝翫か名残狂言なりとて繁昌せり 芝
居より帰り 仕たくして船に乗て讃岐へと出舟す 雨降
出して其夜は一里はかりも出たらんとおもふ

同廿一日 岸につきて一夜を明し候へと 誠に皮葺の音耳
につきてみなみな一夜いねられす 生れ出でのちかゝる
船路の楫枕せし事は たれもたれも江戸のものにはなき
事なれば 馴ぬ一夜の波の音あらき事はむへなりけり
からまくら帆つゝの縄のとけとけと夢もむすはぬ浪の音
かなと 船のうちに誰やらんすしたり 七つころより
天気になりて船出す

同廿二日 天気 風つよくして暫時に十五里の海上をはし
り 高波たちことの外風あらく船むつかしく 舟にゑひ
るもの三四人もあれば 明石の湊にとゝまる

同廿三日 天気 まつあかしにをちつき 皆々休息したく
す 船にゑひたる人をはやすませ みなみな湯に入男子
は髪ゆひ髭なとするもありけり

同廿四日 天気よく人麿の御社に詣てなとするうち 昼頃
より風よく船出するよいいへは いそきてみなみなふね
に乗る

同廿五日 快晴 まるかめにつきて金毘羅に詣るなり 此
御社には 先年柳原にて御陪居の筆 宝塔形の金毘羅の

らひて外に乗うつるへきほどの船にして 船人六人に漕
せ行に 十里はかりもあらんと覺て宮島へつきぬ 日の
暮かたになりて中や新介といふ宿にとまる 此あたりに
は猿鹿の類多くありとおもはる

同二日 天気 宮しまには幟二行にかさり置ぬ 案内の者
をして奥院にあかれは 地藏尊弘法大師不動尊なとたゝ
せ給ひ 庵宮大明神こゝには庵あり 愛染明王の御堂も
あり 菴丁あかりて見れば白糸の庵あり 二丈はかりも
落くたる景色もいとよし 六町はかり行 休堂と云前に
茶やあり 岩谷某師と云は大石一枚三間に横二間もある
へし 此処もまた庵あり 是にて水むすひ手あらふ 十
六丁目といふに二王門あり 次第にかさなり廿二丁目あ
たりまで その間いろいろの仏像あまた見処ありてうるさ
ければしるさす 御旅所飛鳥井ゆとの山 此処は国主安
芸より宮御造営あると云 また鳥居はかり建たり 此処
海みはらして景色尤よし 筆にはつくしかたし すへて
此あたりは山のためすまひも 都ちかき山とはかはりて
おもしろし ひせんのゆふか山岩谷地藏 此処は皆大岩
にて通りぬけ也 不動毘沙門道四間半と云 福島直則建
立せしよし 宗盛公の御建立白銅のつりかね われたり
申さぬ事なりといふも何のゆゑといふことをしらす 岩
国より飛来不動弥勒菩薩 本堂にたゝせ給ふ 此堂は大

文字 銅にて額に塑造れたる 内陣愛染明王のたゝせ給
ふ上にかゝれり めつらしき文字のすかたなりき 弘法
大師善通寺 屏風浦なとなかめ いや谷白峯に詣て、
大黒屋といふに二夜とまれり


同廿六日 天気よし 是よりまたまた船路にて安芸の宮島
参詣と心さし 夕かたより出立

同廿七日 晴天 此日は風もよくて 備後の糸崎といふ処
にあかり八幡宮参詣 安芸の御家老の城といふあり こ
とに此処はいろいろの島あり 竹原のすみよし明神といふ
ありて詣る また夕かたより雨降出て庵へ碇おろす

同廿八日 雨やまず 此処に滞留 昼過より小さめになり
て舟出し 七里程も行しとおもふに 何ともしれぬ島と
山との中に碇をおろしてとゝまる

同廿九日 雨風やまず 四つころよりすこしこさめになり
しとて 船人とも皆ほね折て漕出しまた七里ほとも行
安芸国おんとの湊につきて船人あかり 水汲もて来り
いろいろ船中入用のものとのひてうして また此處に
いかりおろして一夜はこゝにあかしぬ

五月朔日 大雨なり 此処には清盛公の御墓有 船中より
見あける また公のにらみ潮と名つけしあり 昼ころよ
り天気になりしかとも船さらに動かす 此風にては宮島
へは二日三日も手間とりぬへしといふよて 船人にかた

同元年より焼つきの爐火千弐百年になるなと おこかま
しく申聞す 三十丁目廻廊つき 岩国よりとひ不動堂は
吉川監物より建かへる事と云 御山のうち雌雄からすず
みて 毎年九月廿八日といふには熊野へ飛行 あとは子
鳥残り居候よし 夫より御祈願所の寺と言は菊桐の御紋
つきてあり 境内に亀井松と云あり 五本 鉄にて造り
し  (三尺斗) 如此ものあり 清盛公陣釜の足とて
三本あり 一本の目かた百貫めつゝあるよしを言 住吉
明神の御社神馬二疋つなき 左右石灯籠かすしれす多し
桜の並木あり 五重の塔 本堂は大日如来 九尺間にて
十七間横十間あり 千疊敷の名あり 又蘇鉄四本高さ
丈ばかり 本社弁財天 廻廊のうち額百人一首宮島の景
京大坂并芝居狂言までの額いろいろあり 銅灯籠二十間
ほど立ならひ 又三丁はかり向ひ合て唐銅石とてうろ有
海きはより三丁程の場所 深さ三尺程堀入 大夕にても
潮あかる事なしと云 こゝもまた鹿猿のたぐひ獣多く見
ゆ第一めつらしき事は弘法僧鳥の鳴声を聞たり なるほ
とふつほうそうとしまひをなく引なり

同三日 天気よし けふは岩国錦台橋へとて船路十里はか
り行て かかる橋の五つめわたりそろへは 吉川家のか
まへ城に似たり 錦台橋まで行あひたは 皆家中の住居
のことし 橋渡りて町なみはことの外にきやかにて 江

戸の由見世などのことくりつはなり 紺紅いろいろつくしく 庭にのほりかけたり 百姓やにもおもひおもひに染なしてあり 錦台橋は浅草の観音堂にかけた額の画図のことく あの図を見ればかはれることなし さて船をあかりて陸路行帰り二里はかり 宮島中屋といふ宿やにとまる

同四日 天気 またまた船に乗出し 四つ時ころ屋形まで来り 夫より三原まで漸につきて こゝにて碇おろし船をとゝむ

同五日 天気なれとも夕おそくして四時頃乗出し 備後の福山へ着 是よりあかり歩行するに けふは節句なれば御城下の人々もあそびて 揚弓など射てその所もにきやかし そのうちに船人は水汲入 いろいろのもの買と、のへ来るに 皆々も船へ帰りてまた船を出し 友のみなとへつく 漕出しぬれと夕おそくしてまた休む

同六日 けふも天気はよし ゆふかさんへ詣 ふねよりあかり表里ほと行帰りてまたまた船に乗 むろへといそく此間色々の島あり 大筒小筒なとめつらしき名あり ゆふか山は備前小くりのよし 結構なる御堂あり 此処茶屋に休みて湯に入したくする むろにつきて船よりあかこゝにて船人等に別れ みなみないとまこひするもしはし馴し人々なれば 別るゝも心ほそし 浪風あらき

松はよこに這て いつれの松よりも見処多し 人々もめてたり 此処を大久保といふよし 林屋と云に泊る

同九日 曇 舞子の浜松並 砂は波打きはまてしろくいと うつくし 阿波し島まのあたりに見る 中津波高く なる門を漕船は楫とる子らまくり手の袖なといふへし こゝには敦盛の御墓とて五輪の砂にうつもれる見ゆ 蕎麦ありてあつもりそはといひてうる 此処にみなみな休らふ 須磨あかし見めくるうち さまさまに案内の者と ききかすもおかし まつ風むらさめの宮なと云 又松かしよなれ味噌といふは名物のよし 一の谷一の谷見あけ通りて 須磨寺宝物見る 青葉の笛敦盛公の木像あり 此処より雨しきりに降し 兵庫へ泊らんとせしに 備前内蔵頭御とまりの由にて宿なく またまた雨をしのきて 西宮へといそく 幾田の森明神へもまいらす こゝはむかし平家方の大手なるよし 楠の墳 湊川あたりは殊に雨降つよく成て行わつらひ 西宮まで行かなくて いはらと云処の造り酒屋に泊る

同十日 いはらを立出るに大雨にて 住吉明神に漸に参る 此あたり風色尤よし 芦やの里より二里西の宮広田大神宮 また一里ほと行て木船明神へ参詣す 雨天道あしく 難義なり 此処は松平遠江守御領分のよし 暮かた大坂日本橋川ちや又六方に宿とる

折々は此人らもいかにおもふらん 世を渡る身は浮船のつなて縄引わつらひぬ風あらくして

同七日 天気 九つまへ室へあかる 赤穂の城見ゆる 早崎明神へ参詣 御宮七社あり 藤の花二度咲時はその年祭出るよし 室より姫路へは六里ありとてみなみないそく くれかた銭屋といふ宿に泊る

同八日 天気よし まつ曾根の松を見る 是もむかしのは枯て今は二度植し松のよし 古木の枯たるは積みて傍にあり 夫より二十町はかり行て石の宝殿を見る 巖石を四角にきり 宮のかたちにも似たるさまなり 上には雑揃五六本生たり 廻りは三尺十溝のことくに掘て 其中には鮎なと小魚沢山すめり 神代よりの物といふ なるほとおかしきもの造さして置たりと見ゆるなり また廿四五丁も行はあらひ大明神 夫より又廿五丁程行て高さこ本社 境内に相生の松 是も植直したるものなりとそ尾上のかね いほなくて唐草天人などの形鑄あけてありなるほと唐物と見ゆる 青銅の龜ことに見事なり 龍宮よりあかりしなとさまさまに附会の説多し 都こひしや片枝松なと名付たるいとおかし 本社は任吉大明神なり 六七丁行 兵の宮天満宮巢こもりの松なと云あり 是より砂場にて松の並木凡半道はかりもあるへし 風景ことよろし 手まぐらの松といふ有り かこひてあり 此

同十一日 けふ雨天ゆゑ休息せんと その日は五りうと云ふ人形芝居見物に行 浄瑠璃は当時の上手巴大夫なり 打出し遅く五つ頃川又え帰る

同十二日 小雨 四つ過より天気になりしまゝ 天まの天神へ参詣 それより大坂の御城拝見并西東の御堂 阿彌陀か他 新清水より天王寺まいる 虎の御門猫の御門なとあやし名を付たる処あり 御門額は転法輪之処極楽土東門中心なと ことにむつかしき文字の額 筆者は小野の道風なりと云伝ふ 中堂のうへにはつゝれの錦織たる人二人 杜いろいろ有 夫より高津の宮 幾玉明神参詣す ことの外にきやか也

同十三日 天気になる けふは近所に出て所々見物 小芝居にいらりて三幕見 夕かたより船にのりて京都へおもむく

同十四日 天気 淀引ふね夜舟にて行しまゝ 明け七時半過はし本にあかり 塩やへ着 女子とも迎ひに出 此所におちつき 朝の食こゝにてしたゝむ 夫より山道六七丁相尾明神 また廿丁程八わた八幡宮に詣る 男子には上下 女子には綿帽子杜よりかして 御内陣へ通し拝致させ 御宝物拝見 黄金のとるなとあり 御初穂目録金献備す 大門石灯籠数々有 岩清水井戸経蔵二重の塔二所 石坂を下りて八幡の宮御本地みたらし川ふこの渡し

宇治橋にて菊やに休み中食す 夫より平等院 頼政公の御墳所肩の芝駒つなき松なとあり 御宝物拝見さまさまあり 中に漆ぬりの紙にて造りし立烏帽子あり 赤漆にていろいろの紋尽しとおもふ物付たり 是はわけなき鹿末なる物なから 時代ふるく古色ありて 三四五百年にもなるへきものとおもはる 橋姫の宮は宇治橋のきには有 夫より壺里ほと行て黄檗宗万福寺 伏見六地藏 藤の森 東福寺等見めくる 十二丁ほと行て三十三間堂 大仏堂つりかね見終り 五条三条通り けふは日吉明神祭のよしにて神輿渡り 貴賤群集し道も行かたく 漸々にして茶久と云宿やにとまる

同十五日 天気 此日は用事ありて京都上茶屋へまいり 四つ頃帰る 夫より西国七番札所紫野大徳寺へ行 冷宮大神宮御祭にて 西陣あたりは棧敷かゝりて徹屋は休みなり 全閣寺 平野明神 北野天満宮に参詣す 嵯峨の釈迦開帳あり

同十六日 雨降によりて滞留 四条の芝居は歌右衛門かつほう 二番目里船忠右衛門役海老十郎大あたりのよしにてきゝて例の元氣者達ゆゑ見物す 行むといふまゝともに行て見る 江戸にて見る芝居よりもの事ははりていとめつらしくおほゆ

同十七日 曇 四つ頃より天気になるまゝ出たち 能野権

かね有と云 いほはすれ落てわれてありと云 男子はかり行て見しはなしなり さて舞台へのほり遠目かねなと出して見る 近江八景見渡し唐崎の松なと見ゆる あふみなる海にはしほもなきものをなとからさきの名はおひにけむなと 口さみし人もありけり 八景見といひしか大市にて水かさもまさりて 行行かたきよしやみぬ 頗々の城下を通り石山寺に参る 此山岩白く ここに云みかけ石なとのことし 石山寺といふもうへなり 紫式部の源氏物語書し硯なと云もありて 人にも見する宝物なり まことなるやいなや 夫より瀬田のから橋わたる 大小のはしふたつなり きほうしあり 草津名物うはか餅味はひよし 人々も狂し食ふ くさそうに見へしくさつのうはか餅くふてはうましとんた上ひん 宿りは藤やと云

同十九日 天気なりしか屋ころより大市になりて行わつらひ 高宮にてとまる 王屋とやらん云宿屋なりき

同廿日 天気よし 高宮より出 関原を通る 山上に墓七つあり 下より見上る白旗山 此処竹中半兵衛屋敷あつと云あり こゝにてたけなかわらちと云をうる つよきよしにて駕輿のものとは皆買もてり 又義朝公悪所太よし長の墳なと云あり 此所は青野か原 いかなる事にや昭手の姫守本尊なりとて堂あり 長者の屋敷跡と云

現 吉田の社 新七堂 黒谷 法然上人百万遍道上人腰かけ石 能谷敦盛の墓 肖像かけ物表具はほろの切なりと云 如何にや その外能谷鎧かけの松なと云枯木あり信用しかたし 親鸞上人ぬれ髪社のなと云事あり 夫より南禅寺に行 こゝにて中食 智恵院境内桜木多し 花は此さくら咲そめてより嵯峨のさくらもよしと云 祇園は牛頭天王弘法大師八坂の塔 清水寺石さか登りて見おろす景色よし 観音堂台より音羽の滝見る 爰にて皆々休む 素麺とてん名物なりと云 夫よりさかり 東門跡西門跡は此節ふしんなり 飯といへと結構なる建かた也 此日御影堂へ行て 短冊あふきなと出させ見て土産ものまた便用にあまたとり得たり 短冊は百枚六十五目くらい常つかひによし 夫より百二十匁 高価なるに至りては一枚にて六十匁なるもあり 百枚六十匁くらいなるはよき雲紙に中五六か所全泥にて霞のことく二分三分はかりに横に引てあり

同十八日 天気 けふは京都を出立いたし候まゝ 朝のしたくも遅くなり候ていそぎし故 朝飯は山科へ参候て皆々食事 奴茶屋とやら申候 茄子のさしみなとて朝の食事にはいとよし 夫より一里ほと行大津へ出る 三井寺へ参詣せんとて行しに 女人は常にて至りかたく七月十五日には麓まで参るよし 弁慶の引あけたるつり

は松はやし也 夫より美濃と近江の堺なる赤坂松やに宿とる

同廿一日 天気 出立行 大垣の城めやうとうのわたし此あたり五六丁出水にて漸に通る むかふ山に信長公岐阜城金華山 こうとうの渡なと云処あり 西東門跡のかけ所あり 叶宿 長井肥前守城見ゆる 夫より五里行いぬ山の城山上に見ゆる 是は成瀬準人頭六万石のよし いそかへ宿にとまる

同廿二日 けふも天気よし いそかへを立 大田のわたしうとう坂峠を越るは難義なるよし 十三峠をは駕輿にて乗越たり 麓のかたに五輪の塔あり 是を西行法師の墓なりと云 是非をしらす 夫より大井のひしやと云に泊る

同廿三日 天気 けふはチノコ峠妻子峠峠なと越行ほとに 野尻までは十二里ほともあるよし 皆々もつかれたり のちり井筒やにとまる

同廿四日 けふは御番所越しもあれはとて早く出立 幸天氣よければ大野村小野の庵なと見て寝覚にて休む こゝにはねさめそはとて名物なるよし はやけれといたくせんとて 皆々此蕎麦を食ふにいとよし たゞ醬油の味あしきをなけきし也 浦島の釣とやらん云て 本社は弁財天なり 夫より福島御番所にかゝりて手形等さし出し候

所 ことの外手間とり待せられて 暮かた前になりし故宮のこし若松やと云家に泊る

同廿五日 天気よし けふもまた峠こしなり 鳥井峠廿五町登りて三十町たる 夫よりなら井と云所へ出る 壺里斗 此処に毎年六月廿一日より廿五日迄芝居二軒とり立 土地のものとも狂言致し 江戸よりも小役者とも行ましりて興行するよしきけり 大雨降出て 八つころせはと云宿にとまる 黒かねやと家名いへり

同廿六日 天気 せはを立て拮扶原に出る 山本勘介の城跡といふあり 夫より松本へ出て丹波守御城下を通りこし 浅間の温泉に浴し休らひ かり原峠越をして泊る 旅宿米やと云

同五月廿七日 けふ天気なり 青柳切通し 石の上に百観音たゝせ給ふ 夫より立峠さなか番場峠など越して稲荷山丸屋に泊る

同廿八日 天気 川中島わたし越 たんは川またまた越て屋休みの所にて間に 急き候は、善光寺にて昼開帳の間に逢へしといへは 皆々いそぎ立て善光寺前藤や平五郎方につき昼飯 仕たくして参詣す 折よく昼開帳の間に逢て 大勧進の十令かけ 御開帳終り 階壇めぐりすましてふしやへ帰り宿る

同廿九日 天気曇たり 朝六つ時起出て またまた朝の御

開帳に参詣す すぐに善光寺の町出立したれと 而天にて道はかとらず 上田の宿河内やと云へとまる

同晦日 曇しに昼比より雨降出し 浅間山下を通り あさまの原追わけにて 江戸より来る飛脚にあふよりて引つれ くつかけ榎屋といふ旅宿に泊る 此処は醬油ことにあしく食事に皆々大にこまる 数十日の道中故食事もさまさまなり 江戸の人々のうき事知るには旅こそよけれとおもふ也

六月朔日 曇 此日は臼井峠遠見の御番所を通り行 こゝには権現様御宮あり 仁王能野権現の宮もあり 江戸天満より迎の飛脚はあるし病氣のよし告来る人ゆゑこゝろならずとて道もいそげと 打つゝきたる天気にて金あしくはかとらず 横川の御番所へ手形おさめ無常通り 坂本に休らひ こゝにて又帰りの人々急き帰るもありて 色々評議し 市郎兵衛は手代半蔵つれて 馬にて急き帰る事になりぬ 迎飛脚の者と連たる男五兵衛と替て供とす 雨降道あしきにいそきしま、 けふは殊にくたひれたり 凡十里はかりも来つらん 雨のみならず雷電すましかければ 板鼻駿河やといふに宿とる

同二日 天気くもり候へと早々立出る たゞ道を急き 板鼻より十二里ほともあるへし 能谷宿までたとりつきて させ屋半蔵と云ものゝ家にとまる

同三日 けふは大市なり 中々途中安からず 宿籠輿に乗てわらひ宿にとまる

同四日 いそきにいそきて板はしへ五つ半ころ着ぬ まつ江戸よりの迎ひ第一番に久兵衛にあひて 久兵衛茶やを見立 その所に入りて落付しはらく休良 江戸神田のはなし安否たつね居るうち 若旦那むかひとしてにこにことし来りあひ候事のうれしさかきりなし その外迎の人々皆々に面をあはせ 先こゝまでのよろこひ また神田へ帰りて旦那と新造ふたりの顔見はやと心うれしくてとくとくとかこのものいそきたて、 迎の人々皆うちつれたちつる 文政十三年乙酉六月四日といふに 柳原松下町の家居にめてたく着ぬ けふまでの日数は八十一日に及ふになむ

伊勢まうてよし野たつたに須磨あかし

安芸もさぬきも見てきそ路かな

北沢氏いとしるす

(国立国会図書館所蔵)

作者中村いとしについて

中村いとしは御豊方御用達を代々勤める中村弥大夫家の嫁である。本文にもある岡崎の大樹寺令仏堂前(現西光寺)の墓碑によると、中村弥大夫第八代の妻であり、本文に再

三登場する第七代弥大夫仏庵は舅にあたる。

御伝馬役の一人で、南伝馬町二丁目などの名主を勤める高野新右衛門直孝の妻はなは中村弥大夫仏庵の娘である。「中橋なる花女」と記され、「高野氏」というのは直孝のことである。伊勢詣に同行した天満屋一行は、直孝・はなの長女いくの嫁き先で、みを女はいくの姑、市郎兵衛はいくの夫である。

高野新右衛門直孝は「撰要永久録」の编者として知られている。東京都公文書館に所蔵されている「家譜下書」類、「日記書抜」によって、当時の両家の動向の一端が判明する。いとと中村弥物兵衛との婚姻は文化二年(一八〇五)三月である。直孝・はなの婚姻か前年の文化元年(一八〇四)九月、はな一五歳である。いとも同し年頃とすれば、文政八年(一八二五)には、三十台の半は頃である。市郎兵衛妻いくは文化四年(一八〇七)生まれ、名付け親ははなの父中村弥大夫、いく出産の祝いにはいともよはれるなと、頻りに交流があったと思われる。いとと市郎兵衛との婚姻は文政七年(一八二四)、いく十八歳、文政八年には十九歳、市郎兵衛も二十歳代とみてよいだろう。中村家は代々弥大夫を名乗り、御用達町人御豊方の一人であった。大樹寺(西光寺)の墓碑は中村弥平兵衛吉貞、その子弥平大夫時吉、その子弥三右衛門高好の三人を祀ったものであ

る。寛政十二年（一八〇〇）の建立であるが、この年滝山東照宮の修復がされている。征夷府儒員柴邦彦撰の碑陰によると、出自は平高望の家来で、宗平は、治承年間相州中村庄の庄司として頼朝に従い、勲功をあげ、以下十二代にわたって各地を転戦し、十三代宗時に至り尾州中村城に食し、その子吉貞は織田信定におわれ三河碧海郡に居を定め、その曾孫吉廣が中村弥大夫の初代となる。仏庵は「黒髪山縁起繪巻」（寛永寺所蔵）の詞書で「弥大夫吉廣の時に至り岡崎の麾下に隸し永録の年はしめて食禄を賜り天正の年大駕に従ひ奉りて江戸に移れり」と記している（小沢弘氏翻刻）。平高望の時代から岡崎に痕跡の残された吉貞まで、果たしてその系譜をつなげることができるのかどうか。ともかく宗平・景平は実在の人物である（新人物往来社『鎌倉室町人名事典』）。高好は圓賀齋と号し、和歌を好み、聯歌をよくしたという。

仏庵は江戸へ出た吉廣から数えて七代目、書家として知られた。「江戸当時諸家人名録」（『近世人名録集成』）には「仏学」とある。文化九年（一八一二）公務を息子に譲り、天保五年（一八三四）八十四歳で没した。その子弥大夫（弥蔵、宗錫）も、碧海と号する画家として同書に記載されている。高野純三は「中村仏庵の死」（『伝記』10巻5号）で「太平の世に気候に育った文人」との評をして

いる。人名録などには、名は蓮、蓮、字は景蓮、景蓮、景蓮、号は仏庵、至観、士観、仏、南無仏庵、雲介などと記されているが、西光寺の墓碑には吉連とある。「日記書抜」には初代高野新右衛門二百回忌にあたって、「吉連上」として和歌を贈っている。

住居は柳原松下町、正確には神田九軒町代地続松下町一丁目代地である。この地は滝川三郎四郎（丹波守）屋敷跡で、享保五年（一七二〇）四か所に分散した松下町代地の一つである。中村弥大夫の屋敷は天和元年（一六八一）にはえいたい島、宝永元年（一七〇四）から享保三年までは京はし南一丁目と記されている（『大武鑑』）。神田に移ったのは少なくとも享保五年以降である。明治六年の「六大区沽券図」にはすでにその痕跡は失われている。

寺は、はな弟弥五郎の葬式が深川法禅寺で行われていることから、浄土宗法禅寺と思われるが、法禅寺の跡をついでいる神田寺の話では墓碑はすでに失われているという。天満屋、矢田市郎兵衛は、当時木挽町七丁目に間口七間と五間の二筆の土地を所持し、そこに居住していた。坪数合わせて二五三坪、沽券高千五百両の土地である（旧幕府引継書「沽券印鑑帳」）。いずれも寛政十年（一七九八）購入、当初町内家持伝之助姉みを名義であったが、享和二年（一八〇二）弟伝之助改め市郎兵衛と土地を交換する形

で譲渡した。その後この二筆は、みを夫伝兵衛（市郎兵衛）へ、再度伝之助（市郎兵衛）へ、みを実子余之助（市郎兵衛）へ、病死により余之助兄伝兵衛（市郎兵衛、いく夫）へ、その子幾太郎（市郎兵衛）へ、病死により弟錫次郎（市郎兵衛）へ、ふたたび実父了宝事市郎兵衛へと譲渡され、嘉永五年（一八五二）売却している。こうした再三の移動はどのような理由によるのだろうか。当時の慣行からいって弘めの費用もかなり必要だった筈である。「日記書抜」には、高野家が資金の融通に助力した記事もみられる。文化十年（一八一三）十二月木挽町七丁目天満屋市郎兵衛は御用金五十両を上納している（旧幕府引継書「御用金上納帳」）。業種は不明である。酒問屋に矢田姓のあること、いくと市郎兵衛の媒をしたのか、南茅場町の小西四郎兵衛であることから、酒の販売に関係があったのではないかとおもわれるが、はっきりしない。

最後に、旅をした年月のことである。出発のところでは文政八年（十を抹消）乙酉とし、巻末では文政十三年乙酉としている。乙酉は文政八年である。和歌山では、文政八年四月十六日、大風雨のために「御祭礼御旅所・御飯屋吹倒る」事態が発生している（『紀州災異誌』）。本文五月十六日に京都で芝居を見物した記事があるが、文政八年五月、演目や配役は異なるが歌右衛門とえび十郎が共演

している（『歌舞伎年表』）。また、文政十三年はおかげ参りの年であるが、おかげ参りにともなう混雑ぶりについて記されていない。したがって、旅は文政八年のことと思われるが、本文にもある江ノ島一の鳥居の修復は文政十年で、仏庵書の記念碑も文政十年となっている（『藤沢市文化財調査報告書』第六集）。「伊勢詣の日記」の成立が文政十三年で、日記をまとめるにあたって作為が加えられたということなのだろうか。

以上、旅の記述もさることながら、作者が中村弥大夫家の嫁であることに興味を覚えて紹介させていた。地名、寺社名の当て字はそのままとした。登場人物を手がかりに、いについて調査したが、不明な点が多く残されている。今後の課題としたい。

なお、高野家については都史紀要二十八「元禄の町」を参照されたい。同書高野家系図でいくの没年を文政七年十二月としているが、これは市郎兵衛との婚姻の年の誤りである。お詫ひして訂正しておく。

調査にあたって調布学園女子短期大学助教授小沢弘氏、藤沢市文書館長高野修氏、近世女性史研究会の柴桂子氏、牧田りゑ子氏から御教示をいただいた。西光寺御住職丸山法竜御夫妻には中村家墓碑の調査を心よくお許しいただき、ご案内いただいた。改めて御礼申し上げます。